

中国清朝における翻訳者および翻訳対象の変遷

永田 小絵
(獨協大学)

This paper addresses transition and dynamics of translation and interpretation during nearly 300 years of Qing dynasty, focusing on three types of translation: translation required for internal affairs of Qing, a multi-language nation; translation and interpretation by missionaries; and translation capacitated by the Self-Strengthening Movement. Although they were different in translator groups and employed methodologies, all shared a primary philosophy of "absorbing new knowledge, educating the public, and promoting the national interests." Translation also served as a kind of social weapon and the paper examines what aspects the translators sought and precisely reproduced during their translation, and what were the translators' judgments and how they manipulated texts when closely following original texts seemed to hinder translated texts' receptive and educational potentials and/or efficacies on social developments. The examination reveals social impacts of translators' judgment and their translation.

1. はじめに

中国清朝の約 300 年にわたる歴史は、明朝に対する李自成の反乱を外来民族である満州族(満人)が制圧し、政権の座に就くというドラマチックな展開によって幕を開けた。満人は朝廷に入ってから漢民族(漢人)との融和をはかり、公文書を満・漢・蒙古文で作成するための翻訳局を置き、朝廷内での国内事務および外交のための翻訳・通訳を行っていた。

その後、ヨーロッパから派遣された宣教師によって教義書や実用書、技術書が翻訳された。西洋の実学を導入する洋務運動に先立ち、林紘を代表とする翻訳小説ブームが起こり、後に西欧の自然科学や社会科学を導入する目的で外国語学校や翻訳書の印刷所などが各地に設けられた。これらの外国語学校から世界に派遣された留学生が帰国し、翻訳に従事するまで翻訳は外来の力に頼るしかなく、2カ国語を解し自らの母語へ翻訳を行う近代的な意味での「翻訳者」が現れるのは、清朝末期を待たなければならない。

NAGATA Sae, "Transition and Dynamics of Translation in China during the Qing Dynasty."

Interpretation Studies, No. 6, December 2006, Pages 207-228.

(c) 2006 by the Japan Association for Interpretation Studies

参考文献としては、中国史に関する（香港・台湾を含む）日中両言語の文献から関連部分を抽出することができるほか、『中国翻訳事典』から人物、関連文献、概念などの記述を参照した。さらに翻訳・通訳史に関しての先行研究である馬祖毅の労作『中国翻訳史』、黎難秋編『中国通訳史』などから詳細な史実を知ることができた。また、孔慧怡の論文「中国翻訳伝統的幾個特徴」は中国の伝統的な翻訳の特徴を分析している。史書では正史として『清史稿』、『満州実録』などを参照できる。

本論では、清朝における本国人による翻訳、宣教師による翻訳・通訳、洋務運動の成果としての翻訳という、性質の異なる 3 種類の翻訳を取り上げた。それぞれに異なった翻訳者により異なる翻訳の方法をとってはいるが、「新たな知識を吸収し、国民を啓蒙し、国益に資する」という価値観によって常に支えられてきたことは共通している。

翻訳が社会性を持った一種の武器であるとするれば、翻訳は何に対して忠実であるべきなのか、あるいはオリジナルテキストに忠実であることが目標言語テキストの啓蒙性や受容可能性、芸術性あるいは社会進歩に対する有益性を損なうおそれがある場合に、翻訳者はいかなる主体性を発揮し、どのような操作を行ったのであろうか。

本論では、清朝における翻訳者および翻訳の対象となったテキストの変遷を歴史的に分析する。この分析によって、翻訳者の主体性と翻訳が社会に与えた影響について検討したい。

2. 中国翻訳史概要

中国には東漢時代から五四運動以前までに 3 回の翻訳ブームが起こったとされている¹⁾。以下、本題に入る前に中国翻訳史を簡単に振り返ってみよう。

2.1 仏典翻訳活動（2～9 世紀）

最初の翻訳ブームは、漢代から隋・唐・宋代にわたり、およそ 800 年続いた仏典翻訳である。四大訳家と呼ばれる翻訳者が有名である。四大訳家とは、鳩摩羅什（350-409）、真谛（499-569）、玄奘（602-664）、不空（706-774）を指し、このうち玄奘のみが中国語を母語とし、他は全て外国人僧侶である。仏典翻訳に従事した人数を見ると、漢代末期から唐武宗の廃佛までに中国で翻訳にあたった翻訳者は外国人僧侶が圧倒的多数を占め、本国の僧侶は後期になってから徐々に少数ながら現れてきている。800 年近くのあいだ、仏典翻訳は外来の力に依存していた。孔慧怡（2000）は「国内知識階級は翻訳活動を本国文化の主流として位置づけることがなく、翻訳はずっと文化の周辺的な作業であると見なされ、知識人の従事する活動とはなりえず、当時の中国ではまだ儒教の勢力が圧倒的であったことも本国人翻訳家の出現をさまたげた大きな原因である」と分析している²⁾。仏典の翻訳にあたっては、外国人僧侶が梵語（サンスクリット語）から漢文（ここでは当時の中国語を便宜上「漢文」と呼ぶ）へ口述翻訳（現在「サイト・トランスレーション」と呼ばれている通訳法に同じ）したものを中国人僧侶が書き取る方法が広く行われていた³⁾。この「外国人による口述翻訳と本国人による筆記」という形式はその後も継承されることになる。

2.2 キリスト教宣教師による翻訳活動（16世紀末～17世紀）

宋代からこの時期に至る長い翻訳活動の空白は、モンゴル帝国の侵略による外来政権（元王朝）に取って代わられたことが大きく影響している。元代に入ると、広くユーラシア大陸を支配していたモンゴル族が外交の主導権を握り、東西交易を行った。その後、漢人の反乱によって明王朝が建った。数百年の間、外国との接触を断たれ、外国語を解する人材が国内には全く存在していなかった長い空白を経ておとずれた第2次翻訳ブームは明朝に始まる。イエズス会は中国語を解する宣教師を派遣し、中国との融和策をとった。宣教師は敬虔な信徒であると同時に、さまざまな学問に秀でた専門家でもあった。中国（明朝）に派遣された宣教師の中で最もよく知られているマテオ・リッチ⁴⁾はイタリア生まれのイエズス会宣教師で、中国開教の祖といわれ、教義書・科学書を中心に多数の漢文の著述がある。明末の著名な科学書『幾何原本』⁵⁾は、マテオ・リッチの口述翻訳を朝廷学者である徐光啓⁶⁾が筆録したものである。

仏典翻訳では、少数ながら本国人の翻訳僧がおり、玄奘のように重要な役割を果たした者もあったが、イエズス会による翻訳活動は完全に外国人によるものであった。これは宣教師たちが中国に到着する前から漢文と中国文化の修得に努めたためである。彼らは中国語を話し、中国の衣服を着、朝廷の礼法に従った。とりわけ、マテオ・リッチは自ら儒学をおさめて中国の士大夫階級に巧みに取り入り、西欧の自然科学を伝えることで朝廷の内部に入り込んでいる。当時の宣教師には中国語の辞書や文法書を著した者もあった⁷⁾。

この時代の翻訳も、仏典と同じく外国人宣教師による口述翻訳を中国人が筆記する方法を採用している。翻訳書の出版に際しては、外国人宣教師が口頭で中国語に訳したものを中国人翻訳者（外国語を解さないが便宜的に「翻訳者」と呼んでおく）が書き取り、さらに中国文として自然な形に編集・潤色して訳文を仕上げる方法がとられた。しかし、その後いわゆる「典礼論争」⁸⁾が起こり、宣教師による翻訳活動も衰退した。

2.3 アヘン戦争後の「西学」翻訳活動

アヘン戦争（1840-1842年）によって、植民地と封建社会が隣りあって存在する状況に陥った清朝中国に「洋務運動」が起こった。国家としての体制は崩さず、実利実用となる西洋の技術や学問は積極的に取り入れていこうとする「中体西用」が提唱された。この時期にあつて、翻訳者は明らかに翻訳を社会変革の武器として意識し、明確な意志をもって情報の取舍選択と文体の操作を行っている。

以上、簡単に中国の「3回の翻訳ブーム」と呼ばれる歴史を振り返ってみたが、中国において翻訳は、清朝末期以前には主に外来の力（僧侶、宣教師）に支えられて来たことがわかる。近代的な意味での翻訳者（自身が2カ国語を解し、母語へ翻訳を行う翻訳者）の出現は19世紀半ば以降の「西学」翻訳活動を待たなければならない。洋務運動と翻訳については後ほど詳述することとする。

3. 清朝の言語環境

3.1 清朝（1644-1912）の成立

1616年、女真族の一支族である満人にヌルハチと称する英雄があらわれ、後金という国を建てて明朝の支配から独立し、民族独自の文化を主張するようになった。その後、李自成の乱により倒された明朝の混乱につけいり、1644年、満人は賊軍である李自成を討つという名目で北京紫禁城に入城し、政権を奪取した。満人の統治は階級格差の是正、税の減免、耕地の拡大、辺境における遊牧民族と農耕民族の和平共存実現、チベット・ウイグル・モンゴル・台湾地区の統一など、国力の充実と領土の拡張に大きく貢献し、康熙・雍正・乾隆の三帝で歴史上もっとも繁栄した社会を築き上げている。清朝は中国の歴史において最大の版図を形成した国家となった。現代中国の主張する領土も清朝最盛期において実現した範囲をその基準とし、辛亥革命において孫文が主張した「五族共和」、すなわち「漢・満・蒙（モンゴル）・蔵（チベット）・疆（ウイグル）共和」の由来も清朝によって拡大された版図に依るものである。民族政策の面から見ると、漢人に対して満人の習慣である辮髪と服装を強制したほかは、満漢の差別はほとんどなく、積極的な融和政策を採った。

3.2 清朝の公用語と翻訳

清朝を築いた満人はもと女真族の一派である。彼らの話す女真語はもともと文字を持たなかった。そのため、話し言葉は女真語、書き言葉はモンゴル語で行う習慣が16世紀末まで続いていたが、後金を建てたヌルハチが国内の学者に命じてモンゴル文字をもとに満州文字を作り、女真文化の維持と発展に努めた。これによって、後金時代に漢文の典籍を大量に翻訳し、漢人の文化、とりわけ封建王朝の統治について学ぶこととなった。これが、後に漢人にとって代わって広大な中国を治めることになる満人に、基本的な治世の方策を提供することになる⁹⁾。

『清史稿』¹⁰⁾によれば、清朝には「筆貼式」と呼ばれる官員がおり、朝廷内の翻訳・通訳・上奏文書の作成に携わっていた。「筆貼式」には満人、漢人、蒙古人の3民族がいて、主に国内で用いられる公用言語間の翻訳を行った。清朝は多民族多言語国家として各民族の言語を尊重していたため、官営学校で満・漢・蒙の各言語を教育し、「筆貼式」として通訳官に登用した。清朝の主な翻訳担当部署は下記の通りである。

- 1) 内閣蒙古房：蒙古、イスラム、チベット各民族のために公文書類の翻訳を担当する。
- 2) 内閣漢本房：漢文書籍のうち満文翻訳書がないものを翻訳する。
- 3) 理藩院蒙古翻訳房：蒙古文への翻訳を担当する。
- 4) 内閣実録館：歴史事実を漢・満・蒙古文で記録するが、漢文版を正本とし、それを満・蒙に訳す。
- 5) 内翻書房：上述以外の文書・書籍を漢文から満文へ翻訳する。

清朝における漢文から満文への翻訳対象は皇帝勅諭など公文書類のほか四書五経、史書、四大奇書、詩・詞・曲などの古典文学などあらゆる書籍を網羅している。『満州実録』には漢文と満文以外にモンゴル語も併記され、管撰・私撰の辞書も多く作られている。翻訳は原則として上述の漢文・満州語・モンゴル語間で行われていたが、紫禁城内の扁額には、さらにチベット語とウイグル語も見られる。清朝は上述したように民族融和策を採る立場

を守った。しかし、実質上の清朝最初の皇帝である世祖（順治帝、在位 1643-1661 年）は漢人の文化を好み、中国の古典や文学書に親しむなど、中国文明に傾倒し、二代聖祖（康熙帝、在位 1661-1722 年）も四書五経に通じるなど、満人の民族文化は徐々に漢人の文化に呑み込まれていくことになる。そして満人独自の文化と言語は衰退の一途をたどり、満文は現在では話し手がほとんどいない死語となってしまった。だが、清朝で用いられた漢文¹¹⁾がその後の中国で共通語としての地位を保ち、民族統一に貢献することになったのは非常に興味深い事実である。

4. 本国人による外交の通訳と翻訳

4.1 朝貢外交と翻訳通訳

諸外国との外交においては、1875 年にイギリス駐在大使を派遣するまで清朝は明朝の外交政策に倣って、周囲の国々が中国の徳を慕って供物を捧げるために訪れ、中国皇帝がそれに対して恩賜を与えるという「朝貢外交」の姿勢を貫いてきた。清朝と朝貢関係にあった国は、ベトナム、ミャンマー、タイ、朝鮮など周辺国家に限られていた。史書に記載された「外交使節」は往々にして朝貢を通じて清朝に取り入り、通商の便宜を図ってもらおうとする貿易目的の訪問団であり¹²⁾、清朝は豊かな中国の物資を周辺諸国に分け与えるという形式の外交と貿易を行ってきた。確かに、イギリスとの貿易において清朝がイギリスから輸入したい物資はほとんどなく、長年にわたって清朝の大幅出超が続き、イギリスから大量の銀が清朝に流入したことがアヘン戦争勃発の原因となっている。

こうした朝貢形式の外交において、自国の翻訳通訳官を持たない清朝は、西欧諸国との交渉を朝廷内で官職に就いていた外国人宣教師に頼ることになった。中には朝廷の理藩院に正式の通訳官として採用された宣教師も存在している。「華夷秩序」の価値観を持つ朝廷にとって宣教師たちは忠実な下僕として朝廷に仕える者たちであるとの認識があったのだろう。しかし、言語が国内の統治だけでなく、対外外交戦略においていかに重要な要因であるかに気づくのが遅すぎた清朝の失策が後に明らかになる。宣教師による外交での翻訳通訳の問題点が次第に大きくなり、清朝の学者・有識者が自国民に対する西欧諸語の教育を施す必要性を主張しはじめ、19 世紀半ば以降になってようやく外交通訳官育成のための語学校が開設された。

4.2 官営語学学校の創設

1862 年に設立された同文館が清朝最初の官営外国語学校である。1644 年の清朝成立以来、218 年の歴史が流れ、1912 年の清朝の滅亡までわずか 50 年を残すのみであった。その後、上海広方言館、広州同文館などが次々に開設された。1870 年代から曾国藩¹³⁾、李鴻章¹⁴⁾らの建議により留学生が海外へ派遣されるようになった。留学先はアメリカ、ヨーロッパを主としている。黎難秋『中国口訳史』(2002: 77-109) のデータによると、アメリカには 72 年から 75 年まで毎年 30 人ずつ、10 歳から 15 歳の少年が送り込まれ、ヨーロッパには 70～80 年代に 88 名が、日本への留学は 1896 年（日清戦争翌年）から開始し、1905 年（日露

戦争当時)には8000人をこえるほどになった。日本への留学目的は、日本人が吸収した「西学」の修得であった¹⁵⁾。留学生は帰国後に外交の面で活躍するほか、それまで朝廷が顧みることのなかった外国文学や哲学の書籍を積極的に紹介したことで社会の変化に大きな影響を与えた。

官営語学校出身者は、卒業あるいは留学帰国後に国内外で外交に携わる要職に就いたが、すでに西側列強による侵略で弱体化していた清朝は滅亡に至る最後の10年、すなわち20世紀初めまで外交通訳・翻訳の場から宣教師ら外国人通訳官を完全に追放することはできなかった。

5. 宣教師による外交の通訳と翻訳

5.1 ロシアとの外交交渉

宣教師が外交通訳の舞台に現れ、目立って大きな役割を果たしたのはロシアとの交渉においてであった。当時、朝貢以外の外交を認めなかった清朝に対し、唯一ロシアは清朝と対等な外交関係を結ぶことを希望した。ロシア代表が1660年に初めて清朝を訪れた際、順治帝から賜った書簡をロシア語に翻訳できる人材がなく、その書簡は15年後ようやく当時の清朝に滞在していたフェルビースト¹⁶⁾らによってラテン語に翻訳されることになった。そこで、1675年にロシアはギリシャ語、ラテン語、ルーマニア語を解するニコライを外交使節として清朝に送った。通訳を務めたのはフェルビーストである。この時はニコライが跪拝の礼(皇帝の前で跪き頭を床にこすりつける拝礼)を拒絶したため皇帝との謁見は実現しなかったが、フェルビーストは、ヨーロッパ宣教師がロシアを経由して中国に赴任することができるようはからってもらうため私的にニコライに話をもちかけ、通訳の身分でありながら、清国の地図や政治経済さらに軍事に至るまでのさまざまな機密文書を密かにニコライに提供している。ニコライは皇帝との公式会見はかなわなかったが、意外な収穫を得ることとなった。その翌年もニコライは清朝の情報を得るために来華し、跪拝の礼を拒絶することにかこつけて滞在期間を延ばし、多くの情報を手に入れた。外国人宣教師通訳とロシア使節の結託、および通訳による国家機密漏洩が役人の知るところとなり、ニコライはロシアに強制送還されたが、帰国後、入手した情報をもとに『中国漫記』を著した。これは当時の世界では外国人の書いた最も詳細な中国紹介であった。フェルビーストはその後もニコライと連絡を取り続け、1688年にはついにイエズス会の派遣した6名のヨーロッパ宣教師がシベリアを経由して清朝に入ることが許可された。ポルトガルのマカオでの特権取得もフェルビーストの働きと無関係ではない。

5.2 宣教師に頼らざるを得なかった外交交渉

清朝には欧米諸言語については自国の翻訳・通訳者が存在しなかったため、欧米との外交に際しては宣教師の力に頼るしかなかった。康熙帝の時代に朝廷で外交通訳や翻訳に活躍した宣教師には、前述のフェルビーストのほか、ペレイラ¹⁷⁾、ゼルビヨン¹⁸⁾、ブーヴェ¹⁹⁾らがいる。これら通訳・翻訳を務める宣教師たちは、清朝に多くの科学知識と技術を提

供して朝廷の重用を受けていたとはいえ、上述のようにその真の目的は宗教的勢力の拡大にあった。そのため、フェルビーストに限らず、宣教師たちはまず漢語を身につけ、朝廷内部に入り込む手段として当時の皇帝が特に興味を抱いていた西欧の技術や学問の研鑽に励み、それらの知識を朝廷内で講じ、専門書を翻訳するために朝廷に登用され、さらに外交通訳を通じて西欧に清朝の情報を提供した。自らの本来の目的を果たすために翻訳・通訳活動を利用したと言ってよいだろう。当時の宣教師たちはまた、祖国に対しても清朝に関する種々の事情を事細かに報告した。清朝に対し西欧を紹介しただけでなく、西欧に対しても清朝を紹介する役割をも果たしたのである。

5.3 欧米列強の侵略と宣教師の果たした役割

アヘン戦争をきっかけとし、欧米列強や日本が清朝に対して武力による侵攻を開始し、不平等条約を結んで各地に租界を建設するに至る過程においても、宣教師は翻訳・通訳者として大いに活躍している。当時、清朝には西欧の言語を解する本国人の翻通訳者がなく、また英仏等諸国も専門の外交通訳官を育成していなかったため、宣教師は「中国通」として任務にあたり、欧米諸国に有利になるよう故意に誤訳したり、条約の文言を操作したり、清朝の軍事情報を積極的に漏洩したりした。自国の翻訳者・通訳者がいないために不利な状況に追い込まれる事実を清朝が気づいた時にはすでに遅く、国内には多くの租界が建設されていた。

5.4 宣教師による学術翻訳

清朝に使えた宣教師は、もともと正しい暦を作るために雇用された天文学の専門家としての性格を持っていた。上述のフェルビーストと同様、明・清二代にわたって中国朝廷に務めた天文学者にアダム・シャル²⁰⁾がいる。アダム・シャルは1630年に徐光啓の招きに応じてフェルビーストとともに北京に赴き、ヨーロッパの幾何学による計算法で明朝の暦法を修正し、5年後に中西の暦法を合わせた『崇禎歴書』を完成させている。このほか、「西学」を中国に伝えるために翻訳を行った宣教師には、フライヤー²¹⁾、リチャード²²⁾、ヤング²³⁾、マーチン²⁴⁾などがある。これら宣教師による翻訳書は当時の知識人に多大な影響を与えることとなった。宣教師の翻訳した主な文献を『中国翻訳簡史』からリストアップしてみよう。明朝におけるマテオ・リッチの主な翻訳書には『幾何原本』（ユークリッド幾何学）、『大測』（三角法）、『割圖八線表』（三角関数）、『測量法義』（測量技術）があった。翻訳はマテオ・リッチが口述し、徐光啓や李之藻²⁵⁾ら中国の学者が筆記を行っている。これによって西欧の進んだ自然科学の知識に古くから中国で独自の発展を遂げてきた学問が融合し、中国の自然科学は大きな進歩を遂げるようになった。

清朝における自然科学の翻訳書の代表的なものを一部だけ挙げれば、数学の分野では『歐幾里得和阿基米德（ユークリッドとアルキメデス）幾何原理』、『算術纂要總綱』、『借根方法節要』、『勾股相求之法』、『八線表根』、『比例規解』、『對數表』などが、力学では『泰西水法』、『奇器圖說』、地理に『坤輿万国全図』、冶金鋳業学に『坤輿格致』、軍事技術に『火

攻契要』、医学生理学に『泰西人身説概』、生物学に『獅子説』、『進呈鷹説』などがある。いずれも外国人宣教師と中国の学者が協力して二人三脚で翻訳にあたったものである。江南製造総局内に置かれた翻訳館では宣教師の口述翻訳を中国人が文字化する作業を行っていた。フライヤーの記述²⁶⁾によると以下のような翻訳法を採っていたようである。

「翻訳の際には、まず西洋人が原書を熟読して内容をよく理解してから中国人と話し合い一緒に翻訳していくか、西洋人が逐語的に口頭で訳したものを中国人が書き取るかのいずれかを採った。難しい箇所があれば、中国人とどうすれば内容が明らかになるかを検討した。中国人が理解できない場合には分かるように説明をした。翻訳が終わると、中国人が初稿を推敲潤色して、中国の文章習慣に合うようにした」。

宣教師と中国人との協力による翻訳書には、「利瑪竇口授、徐光啓筆受」「湯若望口述、焦勗撰」、「艾儒略口述、瞿式穀筆受」というように「外国人氏名、中国人氏名」の順で書かれ、外国人氏名の後に「口述、口授」、中国人氏名の後には「撰、筆受、訂」などとあり、時に「○○注釋」の文字が加わることもある。現代の考え方では筆記をした者は翻訳者とは認められないかもしれないが、中国においては翻訳に参加した中国人士大夫も、翻訳を口述した外国人宣教師と同様に翻訳者としての地位を与えられている。これは、翻訳小説で清朝を代表する翻訳者として知られるようになる林紘の例にも当てはまる。

5.5 江南製造総局での翻訳事業

清朝末期の学術翻訳に特に大きな役割を果たした機関が江南製造総局である。江南製造総局は1865年に李鴻章の奏上によって開設を批准された。1868年6月に翻訳館が正式に設置された。ここで翻訳口述にあたったのはフライヤー、ヤング、クレイヤー²⁷⁾らであった。筆記翻訳者には華若丁、徐雪林などがいた。翻訳書の出版も江南製造総局の中に設置された印刷所で行われた。重要書籍の場合は刊行前に西洋人と中国人が共同で最終校正を行ったが、一般的な書籍の場合は最終的な訳文はすべて中国人の手に委ねられていた²⁸⁾。このとき、すでにフライヤーによって次のような科学技術関係の専門用語の翻訳基準が作られている。

- 1) すでに中国語の中にあるものはそのまま用いる。そのため、もともと中国語で書かれた技術書および以前に翻訳された書籍で使用されている用語または訳語を調べて使う。
- 2) 新たな訳語を作る。①新しい漢字を作る方法：たとえば金属や鉱物に関しては原語の発音に類似した音を持つ基本的な漢字に金偏や石偏を加える（マグネシウムを鎂、シリコンを矽とするなど）。または滅多に使われない漢字を利用して新しい意味を付加する。②二文字以上で説明的な訳語を作る（酸素を氧氣、晴雨計を風雨表など）。③音訳する。原語の発音を模して漢字表記する。このときは漢語の発音に依拠する。

これらの用語はそのつど原語と訳語を対照して記帳することとなっていた。江南製造総局で翻訳された書籍は、工学、地学、音声学、数理学、化学、医学、農学など自然科学の基礎理論書がほとんどであった。最終的な校正はこれらの学問に精通した中国人知識人がその任に当たった。

5.6 宣教師による文学翻訳

皇帝や朝廷内の士大夫の興味が西欧の科学技術と実学の吸収にあったため、宣教師たちは文学翻訳とはほとんど無縁であった。明朝の時代にマテオ・リッチが「イソップ寓話」を携えて来華し、その著作²⁹⁾のなかでイソップの言行や寓話をいくつか紹介したことは知られている。その後「イソップ寓話」はパントーニャ³⁰⁾の『七克』(1614年)およびトリゴ³¹⁾の『況義』で紹介された。

清朝に入って、フライヤーは小説による社会の悪習改善を提唱し、その後の梁啓超らの新小説運動の先駆となった。またリチャードの翻訳したヨーロッパの歴史書“The Nineteenth Century A History”とベラミーの小説“Looking Backward” (邦題『顧みれば』)は当時の知識人に民族の存亡という面で大きな刺激となった。

5.7 宣教師の翻訳論

現存する宣教師の翻訳観に関する記述にポワロ³²⁾の聖書に対する意見がある。訳者序には「『聖書』の翻訳をする人は敬虔、誠実、慎重を旨とし、あくまでも忠実に行われなければならない。その国の言語習慣にあわせるのではなく、完全に『聖書』の文意に従う。古来より聖書翻訳はこのように行われてきたし、私もまた先例に倣って行おう。重要なのは道理である。読む人を感心させる美しい文章であっても、人に真実の善を与えることに何の益があるのか³³⁾とある。

ポワロはさらに聖書には2種類の読者が存在することを指摘している。「文章の分かりやすさや読みやすさに関係なく聖書の道理を窮めたいと願う読者と、退屈しのぎに聖書を読んだり訳文の表現や言い回しを気にしたりする読者である。後者は彼の訳文に賛成できないかもしれないが、『聖書』は神が多くの蒙昧な人々を教え導くためにあるものであるから、翻訳者は原文に逐一すべてを合わせるしかなく、増減したり言い換えたりしてはならない」。

6. 清朝の翻訳論

6.1 清朝最古の翻訳論『繙清説』

現存する内国人の手による清朝最古の翻訳論に、朝廷で漢文と満州語の翻訳と翻訳教育にあたった魏象乾³⁴⁾の『繙清説』(清・乾隆年間)がある³⁵⁾。『繙清説』は乾隆五年(1740年)に府内の文書として書かれた翻訳論で、新人翻訳官の教育用に用いられたものと見られている。

「繙清」とは漢文を満文に翻訳することを指している。満文は清朝の公文に用いられていたが、漢民族の持つ先進的な文化を取り入れるために、漢文からの翻訳は朝廷内で盛ん

に行われていた。魏象乾は自身の翻訳経験に基づき、この文章の中で翻訳の原則、基準、新人翻訳者の心得などについて述べている³⁶⁾。その一部を日本語に翻訳して以下に紹介する（原文は文末注を参照）³⁷⁾。

「正しい翻訳とは、原文の意図をよく理解し、原文の順序に沿って、その内容を伝えるものである。増減せず、前後の順序を変えず、内容を取ることに頼ってはならない。……ときに増減や顛倒して訳すことがあっても、それには根拠がなければならない。増やすということは漢文自体に含みがあることを意味しており、増やさなければ意味が伝わらない場合である。減らすのは、漢文に重複がある場合で、減らさなければ言葉が簡潔でなくなる場合である。顛倒させることによって意味を取るというのは、そうしなければ語法に合わなくなるためだ。意味が通じるように訳さなければならない。つまり、清文のスタイルにどうしても合わないという時に、原文を変える。（中略）清文にいささか優れた翻訳者は人目を引くために訳文をあれこれといじりたがり、文字通りに訳すことを堅苦しく思い、意識をしがちである。また語順に従う翻訳は拙劣であると感じ、並べ換えようとする。決まり文句や慣用句を原文にそうあったかのように誤魔化しに用いて、それが漢文の本意に合っているかどうかを考えない。さらに語彙や言い回しに詰まると増やしたり減らしたりして、清文の完成度を高くするためだといいわけをする傾向がある」。

6.2 『採西学議』

馮桂芬³⁸⁾の著した『校頌廬抗議』（1861年出版）全40篇のうち、「採西学議」篇³⁹⁾において自国の翻通訳者を育成する必要性を主張した。その概略を以下に述べる。

「西欧の宗教書などは取るに足らないものだが、数学、物理学、化学など自然科学はわが国を遙かにしのぐ水準である。かつてわが国にこのような学識者がいないのは誠に恥ずかしいことである。また、世間では外国人に言葉を習い通事とか称している輩があるが、どれも衣食にも事欠くような者ばかりがその職に就いたのであって、質が低く、知識が浅く、品格に欠け、金銭のことしか考えていない。しかも蕃夷の言葉をどうにか片言で喋り、商品の名称と数量を書きとめるくらいしかできない。彼らに学問など望むべくもない。今後はしかるべき外国語学校を興し、特に優秀な子どもたちを集めて教育しなければならない。西洋人はわが国の言語・文化・民俗などを熱心に学んできたが、我々は西洋人を通じてしか外国について知ることができない。いつまで教養のない通事に頼らなければならないのか。翻訳・通訳は『天下の第一要政』である。諸外国にはまだ我々の知らない優れた学問が多くあるだろう、それを自ら翻訳し、中華民族の英知をもってすれば、西洋人を必ずや追い越すことができる。青は藍より出でて藍より青しというように」⁴⁰⁾。

この主張はそのまま洋務運動の「中体西用」のスローガンにつながっていくことになる。

7. 洋務運動と翻訳・通訳

7.1 洋務派の主張⁴¹⁾

北京に置かれた京師同文館は、洋務派の恭親王奕訢⁴²⁾ らの上奏によって創立された外国語教習所であるが、奕訢は上奏文の中で、「諸外国の情勢を知るためには外国語に精通する必要がある。外国語が分かれば騙されることもない。諸外国は中国語の学習のために資金を割いて中国人を雇っているが、中国ではこれまで外国語に堪能な人材を育ててこなかった」と指摘している。洋務派の代表的人物である李鴻章 (1823-1901) は翌年同治二年に上海に外国語学校を設立するよう上奏し、以下のように述べている。「中国人が西洋人と交渉する際には、自らの意思や要求を伝えなければならないし、相手の虚実や誠意の有無も把握しなければ対等に渡り合うことはできない。しかし外国人は中国語を習う者が多く、優秀な者はわが国の古典や歴史にも通じ、公文書も読めるのにくらべ、わが国の役人や名士のうち外国語を解する者はほとんどいない。諸外国は上海に翻通訳官 2 名をおいており、外交上の接見では常に外国人に通訳をさせているが、これでは偏りや捏造の恐れがないとはいえない。中国で外国語を解する者といえば通事に頼るしかなく、軍事交渉では通事を雇って通訳をさせている。これらの通事は洋務にとって大きな害となる」。

李鴻章は通事（中国人通訳）に対しては「外国人の勢力を笠に着て同胞を見下し、私利私欲のためにのみ動く。しかも口先では外国語を話してはいるが、十人のうち読み書きができるものは一人か二人しかいない」と酷評している。この時代の民間の中国人通事は外国人の手先と見られていたようである。

張之洞⁴³⁾ は 1898 年に刊行された『勸学篇』で、やはり当時の通事について触れている。「各省に設けられた学館では西洋人の教師が教鞭をとっており、言葉が通じない教師と学生の間に通訳を入れなければならないが、通訳をしている者は外国語が分かるだけで学問には通じていないため正確に内容を伝えることができない。分からない部分は勝手に省略したり易しく言い換えたりする」と述べ、通事への不信感をあらわにし、学術に精通した翻訳者を育てることが急務であると説いた。アヘン戦争 (1840-1842 年) によって、植民地と封建社会が隣りあって存在する状況に陥った清朝時代の中国に「洋務運動」が起こった。国家としての体制は崩さず、実利実用となる西洋の技術や学問は積極的に取り入れていこうとする「中体西用」が提唱された。

7.2 同文館における語学教育

1840 年に第一次アヘン戦争が起こるまで、清朝にとっての外交とは一貫して「野蛮」で「立ち遅れた」「未開の国々」が清朝皇帝に朝貢を行う、というものであった。その後、英国との間に屈辱的な不平等条約を締結させられ、港を開き、租界の建設を許した中国に対して、イギリスとフランスは 1860 年には早くも公使を派遣している。清朝からの公使がイギリスに駐在することになったのは、それからずいぶん後の 1875 年になってからのことであった。これは、イギリスに派遣できるだけの外交知識と英語力を兼ね備えた随行翻訳官が清朝には存在しなかったことも大きな原因となっている。正式の翻訳通訳業務を外国人

に頼るか、または外国人のところに出入りして片言の外国語を耳で覚えた本国の民間人に雑な通訳をさせるしかなかった状況にあって、一部の識者からの上奏で1862年に設立されたのが同文館である。同文館は中国で最初の近代的な外国語学校であった。同文館は設立に際して多くの外国人教師を雇い入れている。記録によると、教授陣の国籍はイギリス、フランス、ドイツ、ロシア、日本である。1898年までに雇用した各言語の教員数としては、最も少ないのが日本の1名（杉幾太郎⁴⁴）から最も多いのがイギリスの12名であった。同文館は最初の頃は正式な規定がなく、優秀な学生であればいつでも入学させ、適宜に留学や実習などに派遣していたが、1876年に正式に8年間の課程を定めることになった。入学年齢や条件は特に定めていないが、ほぼ12歳から15歳の優秀で家柄の悪くない子弟を募っていたらしい。最初の数年間は中国語と外国語および外国の歴史や地理などを教え、後半の数年間はおのおの専門の科学知識を学ぶというものである。学生は2年次から翻訳通訳の練習を開始する。2年次はメモ程度の翻訳から学び始め、3年次で文章、4年次で公文書、5年次以降は書籍の翻訳を学ぶ。上級生はまた学校から政府の外交部門に派遣されて翻訳や通訳の実習を行った。

オランダ通詞や唐通事などを幕府の下級役人として雇用し、長崎で世襲の通訳教育を伝統的に続けてきた日本とは異なり、清朝では1860年代に入ってからようやく翻訳通訳教育を開始した。上述の同文館以外にも上海広方言館（1869年）、広州同文館（1864年）、湖北自強学堂（1893年）、京師訳学館（1903年）など、各国の言語を教える総合外国語学校が各地に設けられた。このほか、琿春ロシア語館、新疆ロシア語館、台湾西学館（英語）、東文学堂（日本語）は言語別に設けられた外国語専門学校である。こうして1860年代から急激に外国語教育が盛んになり、外国語に精通した本国人翻訳者という、近現代の翻訳者像に当てはまる人材が誕生する基盤が整っていった。これらの教育機関で学び、海外に留学し、帰国した知識人たちが翻訳の実践を通じて独自の翻訳論を展開するようになるのは、20世紀初頭に入ってからのことである。

7.3 梁啓超⁴⁵の翻訳論⁴⁶

梁啓超は『清代學術概論』で清朝末期の思想史と翻訳史に言及している。日清戦争の敗北によって血気盛んな若者たちが「維新変法」（明治維新にならって政治制度も変革すべきであるという意見）を主張し、1898年に光緒帝親政を開始するにいたった。西太后と結託していた李鴻章らもひそかにこれを支持した。当時の流行語に「中学を体となし、西学を用となす」とある。張之洞はこのいわゆる「中体西用」を最も好んで口にした。当時の中国では、欧米人は機械の製造と制御、軍事訓練以外の学問があるとは誰一人考えていなかったし、西洋の書物から翻訳されたものを見ても確かに実用に供される技術以外の学問は何も見当たらない。康有為⁴⁷、梁啓超、譚嗣同⁴⁸はこうした「学問的飢餓」の状況で思索をめぐらしていた。梁啓超はさらに嚴復と林紓に言及し、つぎのように述べている。「嚴復の翻訳書（『天演論』：ハクスリー著『進化と倫理』）は決して新しい書物ではないが西洋の留学生で本国の思想界に影響を与えたのは嚴復が最初だ」「林紓が翻訳した小説はほとんど

が欧米の二流か三流の作家のものだが非常に流行した」。

この時代になると、梁啓超らが洋務派と宣教師による翻訳のみに頼る情勢を是とせず、翻訳を通じて同時代の学問を積極的に海外から取り入れていこうという気運が高まった。日本語に翻訳された欧米の書物をさらに中国語に翻訳する「重訳」が盛んに行われ、翻訳者の育成、翻訳家協会の設立についての文章が発表されたのもこの頃である。

8. 清朝末期の学術翻訳

清朝末期になると、各地の外国語学校や朝廷から海外へ派遣された留学生が帰国し、国内で多くの書籍を翻訳・紹介し始めるようになる。現代の翻訳者像に合致する「2カ国語を解し、母語へ翻訳を行う」翻訳者の誕生である。それまでの伝統的な翻訳では、中国の知識人が口頭で訳された内容を聞いて自分なりに消化吸收し、中国文化に合わせた形式で脚色しながら作品を作っていくという方法が採られていた。また、翻訳の対象となった書籍もほとんどが自然科学関係のものであったが、この時期になると帰国留学生たちが次々に社会科学や文化系学問の分野で翻訳書を出版するようになる。

8.1 顔永京 (1838-1898)

顔永京は、帰国留学生として初めて翻訳書を出版した人物として知られている。彼は1854年にアメリカに留学し、1861年に現地の大学を卒業、翌1862年に帰国した。帰国後は翻訳や教育に従事し、1878年からは上海で教会の運営する学校の校長も務めた。1889年に Joseph Haven の “Mental philosophy” を『心霊学』の書名で出版している。原著は全3巻であるが、翻訳したのは緒言と第1巻のみとなっており、完全なものとは言えない。なお、日本では同書を西周がほぼ同時期に『心理学』の名称で翻訳出版している。

8.2 嚴復⁴⁸⁾ (1853-1921)

ハクスリーの『進化論と倫理学』を翻訳し、その序文で人口に膾炙する翻訳の基準「信达雅」を主張したことはあまりに有名である。

しかし、この『進化論と倫理学』には以下のような特徴があり、嚴復自身の説いた「信」（忠実であること）を大いに裏切る結果となっていることは非常に興味深い。この翻訳は原著に忠実に訳された物ではなく、取舍選択され、評論を加えられ、書き換えられ、翻訳者の意見を反映した多くの注釈が挿入されたものであった。嚴復はハクスリーが「進化論」と「倫理学」を一種の対立する概念としてとらえたことを是としていなかったようで、その部分は訳出されていない。魯迅は後に同書を「作られたものだ」と評している。訳書全体の三分の一を占める注釈で、嚴復はダーウィンの『種の起源』、スペンサーの『総合哲学体系』、マルサスの『人口論』、さらにギリシャ哲学者のタレス、ソクラテス、プラトン、アリストテレス、エピクロスの説にふれ、アダム・スミスの古典経済学や、デカルト、ベーコン、コペルニクス、ガリレオ、ニュートン、ラプラスなどの学説を紹介している。スペンサーらが天文学の原理を社会や政治の問題を解釈するために用いた観点到に惹かれた

ことが嚴復の『進化論と倫理学』翻訳の潜在的な契機となっているようだ。編訳または創作と言ってもおかしくない翻訳の方式は、当時の中国社会に対する痛切な危機感を反映したものであると言えよう。

8.3 日本語からの重訳・翻訳

日本が明治維新後に多くの西側文化を吸収し、近代国家へと変貌を遂げた様子は中国の知識人を大いに刺激し、中国も同様に「維新の道」を歩むべきであると主張したのが変法自強運動であった。この運動を推進する「維新派」は翻訳を非常に重視し、大量の翻訳を行った。康有為、梁啓超らは西洋の書物を直接翻訳するよりも、日本語に翻訳されたものから重訳するほうが効率的であると考えた。その理由をこう述べている。「日本は維新以来、多くの有益な書物を翻訳してきており、その数は数千冊をくだらない。政治学、経済学、哲学、社会学など種々の分野を網羅している⁴⁹⁾。しかも「わが国と日本は同じ漢字を用いている。欧米諸言語を学ぶには5年も6年もかかるが、日本語は数ヶ月で読めるようになる⁵⁰⁾」。すなわち、術語の翻訳などに悩むことなく（日本語の翻訳書で用いられた漢字語をそのまま借用すれば）、西側の学問をいち早く効率的に取り入れることが可能になるというわけである。こうして日本語書籍からの大量の翻訳と重訳が行われ、福沢諭吉や中村正直が漢字語に翻訳した社会科学分野の術語・専門用語が現在もそのまま中国語の中で使用されることになったのである。

9. まとめ

以上、およそ300年にわたる清朝の翻訳・通訳の歴史を概観してきた。国家が翻訳・通訳に対していかなる姿勢を取るか、そして他文化、他言語を尊重する姿勢の有無によって、翻訳・通訳のあり方が大きく異なることを発見することができた。

清朝においては、外来民族による統治を順調に行うため、基本的に満文・漢文・蒙古文による翻訳が行われ、朝廷内の翻訳組織も非常に整備されていた。これは国家の統一と安定に不可欠な要素として、清朝の長い歴史のなかで途絶えることなく行われている。これらの翻訳活動はすべて内向きのものであったが、北京官話の制定とともに民族融和に大いに貢献し、康熙・雍正・乾隆の三帝で歴史上もっとも安定し、繁栄した社会を築き上げることに成功した。

ヨーロッパのイエズス会士たちは宣教師として来華するが、布教を全面に押し出すことなく中国文化に迎合する姿勢を見せるとともに、西洋の学者として自然科学や機械技術など実学の分野における翻訳活動で清朝に貢献することによって信頼を勝ち得た。清朝は、宣教師たちの翻訳を通じて新しい学問に目覚めることができたのである。だが、その一方で、彼らが故国と宗教への忠誠心から翻訳・通訳活動を通じて列強の清朝侵略を導いたことも事実である。

伝統的な華夷秩序思想によって、周辺諸国とは朝貢外交という形式しか取り得なかった清朝にとっては、対外貿易や外交における言語の疎通は、ながく自国の問題としてとらえ

られることがなかった。後にアヘン戦争がきっかけとなり、清朝知識人の間に自国民の中に翻訳・通訳者が存在しないことに対する危機感が強まり、それまで顧みられなかった西欧諸語の教育を積極的に推進することとなった。洋務運動のひとつの大きな目標は、外国に頼らずに翻訳・通訳を可能にすることであった。

清朝の翻訳史において、翻訳は「民族の融和、新たな知識の吸収、国民に対する啓蒙、社会変革の実現」という価値観によって支えられる、社会性を持った一種の武器であったと言えよう。

こうした状況においては、翻訳と翻訳者はオリジナルテキスト以外の何に対して忠実であるべきなのかを自問しつつ、自ら主体性を発揮し、目的を達成するための操作を行うことになる。

今後の課題として、小論では触れられなかった清朝末期に始まる外国小説の翻訳については、稿を改めて検討することとしたい。

著者紹介：永田小絵 (NAGATA Sae) 獨協大学外国語学部言語文化学科専任講師、中国語会議通訳者。最近の論文に「獨協大学外国語学部言語文化学科中国語教育における通訳訓練法の応用」(獨協大学外国語教育研究所紀要「外国語教育研究 第24号」2006年3月)がある。

【註】

- 1) 五四运动以前有三次翻译高潮：一、从东汉到宋的佛经翻译，二、明末清初的科技翻译，三、鸦片战争以后的西学翻译。(馬祖毅『中国翻訳簡史』1998, p. 1)
- 2) 孔慧怡「中国翻訳伝統的幾個特徴」p. 16、『亜洲翻訳伝統與現代動向』所収
- 3) 孔慧怡「中国翻訳伝統的幾個特徴」p. 17、『亜洲翻訳伝統與現代動向』所収
- 4) マテオ・リッチ (Matteo Ricci, 1552-1610) 中国名は利瑪竇。1582年、マカオに至り漢語を学ぶ。万歴13年(1585)、両広総督の許可を得、中国で最初の教会を開く。万歴29年(1601年)、北京に上り、明神宗(在位1573-1620年)に謁見を許され、時計、世界地図、ガラス器などを献上し、時計修理の名目で宮廷に出入りするようになる。西欧の発明品や科学技術を紹介することで皇帝をはじめとする人々の興味をひき、布教の目的を達しようと考えたマテオ・リッチは在華20年の間に漢文で多くの科学啓蒙書を表したほか、徐光啓とともに『幾何原本』を中国語に翻訳、さらに中国の四書(論語、孟子、大学、中庸)をラテン語に翻訳し、初めて儒学をヨーロッパに伝えた。(中国历史系列《图说天下 明》pp. 164-165)
- 5) 『幾何原本』 利瑪竇口授、徐光啓筆受、1611年。ユークリッド幾何学を紹介したもので、清朝の数学研究の基礎となった。本書で採用された「点、線、面、直角」などの訳語は現在に至るまで用いられている。(中国历史系列《图说天下 明》p. 167)
- 6) 徐光啓(じょ・こうけい Xu Guangqi, 1562-1633)、明朝末期の著名な科学者。数学、天文、暦法、軍事、測量、農業、水利などに大きく貢献した。(中国历史系列《图说天下 明》p. 166)

- 7) 何群雄 『中国語文法学事始』
- 8) 17世紀から18世紀のカトリック教会内で、中国の伝統文化（典礼）とキリスト教の間のバランスをどのように取るかという問題を巡って行われた一連の論争のこと。当時、清朝中国で活躍していたイエズス会員たちは中国の習慣と文化を尊重し、キリスト教に巧みに取り込むことで中国における信徒数の拡大をもたらしたが、この方法論をドミニコ会やパリ外国宣教会など他の修道会が批判。教皇クレメンス11世は最終的にイエズス会のやり方に非があると裁定を下したため、中国におけるキリスト教は衰退の道をたどることになる。（参照資料：『紫禁城史話』第7話、および「フリー百科事典ウィキペディア・『典礼論争』
[Online] <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%85%B8%E7%A4%BC%E8%AB%96%E4%BA%89>
(2006/08/31)
- 9) 中国历史系列《图说天下 清》p. 11
- 10) 中国国学網站『清史稿』
[Online] <http://www.guoxue.com/shibu/24shi/qingshigao/qsgml.htm> (2006/08/31)
[Online] <http://www.guoxue.com/shibu/24shi/qingshigao/qsgxml.htm> (2006/08/31)
- 11) 当時のいわゆる漢語は、遼東半島に居住していた満人が使用していた山東方言をもとに作られた朝廷内で通用する漢語である。朝廷内で使われたことから「北京官話」とも呼ばれる。これによって中国各地から任用された官員に共通語ができ、意思の疎通が大きく改善された。
- 12) 『中国口訳史』p. 63
- 13) 曾国藩（そう・こくはん Zeng Guofan, 1811-1872）は中国清代末期の軍人、政治家。字は滌生（てきせい）、諡は文正。湖南省湘郷県の出身。弱体化した清軍に代わり、湘軍を組織して太平天国の乱鎮圧に功績を挙げた。
- 14) 李鴻章（り・こうしょう Li Hongchang）1823年2月15日- 1901年11月7日）は、中国清代の政治家。字は少荃（しょうせん）。日清戦争の講和条約である下関条約では清国の欽差大臣（全権大使）となり、調印を行った。太平天国鎮圧後の捻軍鎮圧にも功績を上げ、1870年曾国藩の後を継ぎ直隸総督に就任した。この時に北洋大臣（北の海の海軍大臣）も兼ねたので、淮軍はその後、北洋軍と呼ばれるようになった。その後は清の最高為政者として西太后の信任を得て清の洋務運動に尽力した。この時期には清のみならず世界でも指折りの政治家として各国から尊敬を受けた。
- 15) 『図説 中国近現代史』p. 78
- 16) フェルディナンド・フェルビースト（南懐仁 Ferdinand Verbiest, 1623-1688）ベルギー人。順治16年（1659）、清に至り、西安で布教した。翌年、アダム・シャルの推薦で北京に召され、欽天監となった。康熙3年（1665）、アダム・シャルに連座して獄に下ったが、後に釈放されて北京に戻り、暦の誤りを正し、欽天監副となって天文観測儀器的の製作にあたった。12年、儀器が完成し、欽天監正に上った。翌年、三藩の乱に際し、大小の砲を製造した。15年、ロシアの大使ニコライが北京に来たとき、通訳にあたった。工部侍郎に累進し、北京で没した。『康熙永年曆法』、『赤道南北星図』、『坤輿全図』、『熙朝定案』。（以上、「中国史人物事典」[Online] <http://ww1.enjoy.ne.jp/~nagaichi/chuframe.html> より）

- 17) トーマス・ペレイラ (徐日昇 Thomas Pereira, 1672-1708) ポルトガル人。1672年にマカオを経て北京にのぼり、フェルベーストの推薦を得て清朝廷の天文暦法部に入る。天文学と音楽に通じ、皇帝に西洋音楽を講じ、中国音楽の研究でも知られる。1689年に清朝とロシアとの国境紛争勃発に際し、清朝代表団の通訳を務め、ロシアの要求を断固として拒否し、ロシアに有利な条文を加えることを許さず、皇帝の厚い信頼を得ることになった。1691年にイエズス会の事務担当となり、皇帝に布教に対する制限の緩和を求めて認められ、1706年にはイエズス会中国教区副会長となった。
- [Online] <http://baike.baidu.com/view/100502.htm>
- 18) ジャン・フランソワ・ゼルビヨン (張誠 Jean Franucois Gerbillon, 1654-1707) フランス人。康熙26年(1687)、ルイ十四世の命を受けて来華。西洋の天文器具や書籍多数をもたらした。満州語に熟達し、数学を康熙帝に講じた。28年(1689)、ネルチンスク条約締結の際、ポルトガルの宣教師ペレイラ(徐日昇)とともに通訳の任にあたった。のち中国布教長に就任した。康熙帝に随行して八度にわたって東北およびモンゴルの各地を巡った。北京で没した。著書に『韃靼紀行』、『實用幾何学』、『満文字典』。(「中国史人物事典」)
- [Online] <http://ww1.enjoy.ne.jp/~nagaichi/chuframe.html>
- 19) ブーヴェ(白晋または白進 Joachim Bouvet, 1656-1730) フランス人。ジェズイット会の宣教師となった。康熙26年(1687)、ルイ14世の命を受けて、ゼルビヨン(張誠)らとともに渡清した。翌年、北京に至り、宮中で西洋の学問を講義した。33年(1693)、康熙帝から法王への贈答品を携えて帰国。38年(1699)、ふたたび渡清した。45年(1706)、康熙帝の命によりローマへの使者に立ったが、まもなく途中の広州から召し戻された。47年(1708)、「皇輿全覽図」の作成に参加した。北京で没した。『康熙帝伝』、『漢法小字典』。
- (「中国史人物事典」 [Online] <http://ww1.enjoy.ne.jp/~nagaichi/chuframe.html> より)
- 20) アダム・シャル(湯若望 Adam Schall von Bell, 1591-1666) ドイツ人。万暦47年(1619)、海をわたりアモイにいたった。北京に移って中国語を学び、のちに西安で布教につとめた。崇禎3年(1630)、徐光啓の推薦を受けて北京の暦局に入り、書物の翻訳や日食月食の計算をおこない、『崇禎暦書』の編纂にあたった。清の順治元年(1644)、渾天儀・太陽象限儀・望遠鏡などの天文機器を朝廷に献上した。翌年、『西洋新法暦書』を成し、「時憲暦」として天下に頒布した。まもなく欽天監正に任ぜられ、太僕寺卿・太常寺卿を加えられた。7年(1650)、北京第一座天主教堂を建てた。10年(1653)、通玄教師の号を賜った。康熙3年(1664)、楊光先の讒言にあつて南懷仁とともに投獄された。翌年釈放された。のち北京で病没した。『古今交食考』、『渾天儀説』、『西洋測日暦』、『遠鏡説』、『中国耶蘇会史略』。(「中国史人物事典」 [Online] <http://ww1.enjoy.ne.jp/~nagaichi/chuframe.html> より)
- 21) ジョン・フライヤー(傅蘭雅 John Fryer, 1839-1928) イギリス人。同治6年(1866)、清国の招聘に応じて江南製造局付き翻訳官となる。祖国イギリスより各種の科学書を購入、翻訳に従事するほか、広方言館で外国語教育に携わる。翻訳書は数学、物理、科学、史学、法学、機械技術など多岐にわたり、中国にダーウィンの進化論を最初に紹介した人物として知られている。とくに7年間にわたり月刊誌『格致匯編』を出版し、西欧の最新科学、医薬などの

情報を中国に伝えた功績は大きい。在華 30 年にわたり、うち 28 年間に江南翻訳館で 129 冊を翻訳して、訳語対照表を制定し翻訳の体系化に尽力し 1913 年に職を退いた後、6 万兩を投じて上海に中国初の盲学校を設立し子息を初代校長に任命した。（「上海市地方誌弁公室」 [Online] <http://www.shtong.gov.cn/node2/node2245/node4521/node31943/node63920/node63922/userobject1ai54581.html> (2006/08/31)

孔慧怡「中国翻訳伝統的幾個特徴」

- 22) ティモシー・リチャード (李提摩太 Timothy Richard, 1845-1919) イギリス人。同治 9 年 (1870) 来華、上海を経て煙台、青州に赴き布教の傍ら漢語を学ぶ。1876~1879 年にかけての大干ばつ救援活動によって清朝政府に知己を得、イギリスより購入した科学書をもとにコペルニクスの天文学、蒸気機関、発電技術などを清朝政府官員に講義するようになる。1890 年、北洋大臣・李鴻章の招きにより天津『時報』主筆となる。翌 1891 年 10 月、上海同文書会 (広学会) 総幹事の職を得て上海に赴き、張之洞、康有為、梁啓超、孫中山らと交友を結ぶ。25 年にわたる広学会在職中に『万国公報』など十数種の新聞雑誌を刊行、中国で最大規模の出版組織に成長させた。1902 年には西太后の許可を得て山西大学堂を設立するなど幅広く活躍。在華 45 年、科学知識普及に大きな功績を残した。（「上海市地方誌弁公室」 [Online] <http://www.shtong.gov.cn/node2/node2245/node4521/node31943/node63920/node63922/userobject1ai54585.html> (2006/08/31)
- 23) ジョン・アレン・ヤング (林樂知 J.Allen Young, 1836-1907) アメリカ人。咸豊 10 年 (1860) 来華、1864 年に上海広方言館に英語教師として赴任、1868 年、『教会新報』を創刊 (後に『万国公報』と改称)。1869 年、江南製造総局に入り、12 年にわたって軍事、自然科学、紡織や機械製造などの書籍の翻訳活動に従事した。1877 年から益智書会 (学校教科書編纂組織) 編纂委員、1881 年から中西書院院長を歴任し、1895 年から翻訳・出版業務に専念するようになる。在華 47 年にわたって大量の書籍を翻訳・執筆し、中国知識人に大きな影響を与えた。（「上海市地方誌弁公室」 [Online] <http://www.shtong.gov.cn/node2/node2245/node4521/node31943/node63920/node63922/userobject1ai54580.html> (2006/08/31)
- 24) マーチン (丁韪良 W.A.P. Martin, 1827-1916) アメリカ人。宗教学、ラテン語、ギリシャ語、数学、論理学、物理学、天文学、化学、地学などを修め、1850 年に来華。1916 年に北京でこの世を去るまでの 66 年間に教会学校の創設、新聞発行、同文館及び京師大学堂での英語教師などを歴任し、多くの書籍を翻訳した。翻訳書は心理学、数学、教育学、国際法、政治学、経済学など多岐にわたっている。第二次アヘン戦争では米国公使ウィリアムズ (William Bradford Reed, 1806-1876) の通訳を務め、「天津条約」の起草に携わった。また義和団の変に際しては外国大使館を守るために積極的に活動している。(趙毅“ON W.A. P. MARTIN'S CONFUCIANISM-PLUS-CHRISTIANITY”/丁韪良的“孔子加耶穌”中国社会科学院『美国研究』1987 年夏季号) [Online] http://ias.cass.cn/show/show_mgyj.asp?id=909&table=mgj (2006/08/31)
- 25) 李之藻 (り・しろう Li Zhizao, 1565~1630) 字は振之、号は淳庵居。浙江省仁和の人。万曆

- 年間、進士に及第した。太僕寺少卿に上った。マテオ・リッチに従い、徐光啓らとともに洗礼を受けてキリスト教徒となった。西洋の天文・数学・暦学を学び、暦法の改正やユークリッド『幾何原本』の翻訳などにつとめた。『天学初函』。(「中国史人物事典」
[Online] <http://ww1.enjoy.ne.jp/~nagaichi/chu081.html>) (2006/08/31)
- 26) “至于馆内译书之法，必将所欲译者，西人先熟览胸中而书理已明，则与华士同译。乃以西书之义，逐句读成华语，华士以笔述之。若有难处，则与华士斟酌何法可明。若华士有不明处，则讲明之。译后，华士将初稿改正润色，令合于中国文法。(《江南制造总局翻译西书事略》『中国翻訳簡史』 p. 342)
- 27) カール・トラウゴット・クレイヤー (金楷理 Carl Traugott Kreyer, 1839-1914) ドイツ人。1869 年末から江南製造総局で主に軍事関係の書籍を翻訳するかたわら、広方言館でドイツ語を教えた。1879 年には清朝の欧州視察員の随行通訳者となり、その後はベルリン、パリ、ローマなどの中国大使館員として 24 年間にわたって外交業務に務めることになった。(《北大史学》第 8 輯，第 381 頁，2001 年)
- 28) 『中国訳学理論史稿』 pp. 81-86
- 29) 『畸人十篇』1608 年にイソップ寓話の翻訳がいくつか見られる。(『近代における東西言語文化接触の研究』 p. 3)
- 30) パントーニャ (龐迪我、Didace de Pantoja, 1571~1618) スペイン人。1599 年にマカオに入り、後にマテオ・リッチとともに北京に赴き、朝廷で暦法と地図の製作に従事。
[Online] <http://baike.baidu.com/view/242323.htm> (2006/08/31)
- 31) トリゴー (金尼閣、Nicolas Trigault, 1577-1628) フランス人。1610 年にマカオに入り、南京で漢語を学んだ後、中国各地のイエズス会の活動を視察し、報告書をまとめて法王に提出した。報告の中で中国のやり方を尊重し、宗教儀式を中国語で行うべきであることを主張した。1615 年にヨーロッパに一時帰国し、1619 年にはヨーロッパ各国の宣教師 16 名を引き連れて中国へ戻り、布教活動を展開した。中国上層部の知識人と広く交友関係をむすび、中国文学に対する研究においても功績があった。 [Online] http://www.chinaculture.org/gb/cn_zgwh/2004-06/28/content_52994.htm (2006/08/31)
- 32) ポワロ (賀清泰 Louis de Poirot, 1735-1814) フランス人。1770 年来華、天文学、数学、絵画に秀で、漢文と満文の両方に堪能であった。中国で『旧約聖書・新約聖書』の大部分を翻訳した。印刷刊行はされなかったが、写本が残っている。(『中国訳学理論史稿』 p. 51)
- 33) 原文は次の通り：“翻译《圣经》的人，虔诚敬慎，唯恐背离《圣经》本意，《圣经》大道即错乱了。那翻译的名士，也知道各有各国文理的说法。他们不按各国本国文章的文法，完全按着《圣经》的本文文意。自古以来，圣贤既然都是这样行，我亦效法而行，共总紧要的是道理，贵重的是道理。至于说的体面，文法奇妙，与人真正善处有何裨益？(『中国訳学理論史稿』 p. 51)
- 34) 魏象乾 (ぎ・しょうけん Wei Xiangqian 生没年不詳、雍正・乾隆年間の人) 漢人。清国朝廷に翻訳進士科が設置された乾隆 4 年 (1739) に翻訳者として朝廷に採用され、七品官の官位を持つ翻訳官として漢文 (中国語) から満文 (満州語、本文中では「清文」) への翻訳に

- 従事していた。(『中国翻訳辞典』 p. 167)
- 35) 「魏象乾的《繙清说》」(『中国翻訳』 1998年2月)
- 36) 『中国翻訳辞典』 p. 167
- 37) “夫所谓‘正’者，了其意，完其辞，顺其气，传其神，不增不减，不颠不倒，不恃取意，---间有增减、颠倒与取意者，岂无故而然欤？盖增者，以汉文之本有含蓄也，非增之，其意不达；减者，以汉文之本有重复也，非减之，其辞不练。若夫颠倒与取意也，非颠倒则扞格不通，非取意则语气不解。此以请文之体，有不得不然者，然后从而变之，岂恃此以见长哉？--- 乃或有清文稍优者，务尚新奇，好行穿凿；以对字为拘，动曰取意；以顺行为拙，辄云调换。每用老话为元音，罔顾汉文之当否；更因词穷而增减，反谓清文之精工。”(『中国翻訳辞典』 p. 167)
- 38) 馮桂芬(ふう・けいふん Feng Guifen, 1809-1874) 江蘇呉県の人。1832年、24歳のとき、林則徐の門人となる。後に上海に至り、西欧資産階級の思想に触れ、政治改革と西欧学術の導入による国力の充実を主張、その思想は洋務派と資産階級改良派の両方に影響を与えた。(『中国訳学理論史稿』 p. 73)
- 39) 原文は下記のサイトで閲覧できる。
[Online] <http://www.modernculture.com.cn/list.asp?id=203> (2006/08/31)
- 40) 中国語原文は「中国近代文化研究中心」サイトを参照
[Online] <http://www.modernculture.com.cn/list.asp?id=203> (2006/08/31)
- 41) 『中国訳学理論史稿』 p. 78
- 42) 恭親王愛新覺羅奕訢(きょうしんのう・あいしんかくら・えききん、Aixinjueluo Yixin 1833-1898) 恭親王は清の皇族。道光帝の第6子。咸豊帝の治世には軍機大臣、都統、内大臣などを歴任。アロー戦争中の1860年、イギリス軍が北京に迫ると、北京条約の調印、ついで総理事務衙門の設立に携わった。屈辱的な不平等条約の締結当事者となったため、排外主義者からは「鬼子六」(洋鬼子、すなわち西洋のばけものをつるむ六男坊)というひどいあだ名をつけられた。[Online]
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%81%AD%E8%A6%AA%E7%8E%8B> (2006/08/31)
- 43) 張之洞(ちょうしどう、Zhang Zhidong, 1837-1909) 清の政治家。洋務派官僚として重要な役割を果たした。曾国藩、李鴻章、左宗棠とならんで、「四大名臣」とも称される。[Online]
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BC%B5%E4%B9%8B%E6%B4%9E> (2006/08/31)
- 44) 杉幾太郎(すぎいくたろう) 1874年岡山で生まれ、小学校卒業後上京して時事新報社社長福沢捨次郎の門下生となり慶応義塾に学んだ。日清戦争の際、時事新報社から第一軍従軍記者として派遣され、終戦後は『時事紙』の北京通信員として北京に赴任、その間京師同文館の東文教師に招かれた。『中国人の日本語学習史』 p. 74, 80, 84, 106, 229。
[Online] <http://www.urban.ne.jp/home/nittyu/kaihou/sub3-0504.htm>(2006/07/23)
- 45) 梁啓超(りょう・けいちょう、Liang Qichao, 1873-1929) 清朝末期・中華民国初期の政治改革家、ジャーナリスト、歴史学者。[Online]
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A2%81%E5%95%93%E8%B6%85> (2006/08/31)
- 46) 『中国訳学理論史稿』 pp. 195-196

- 47) 康有為 (こう・ゆうい、Kang Youwei, 1858-1927) 清朝末期から中華民国にかけての思想家・政治家・書家。
- 48) 譚嗣同 (たん・しどう、Tan Citong, 1865-1898) 清朝の民族主義者、哲学者。西太后に弾圧され殺された「戊戌六君子」の一人。[Online]
<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%AD%9A%E5%97%A3%E5%90%8C> (2006/08/31)
- 49) 嚴復 (げん・ふく Yan Fu, 1854-1921) 清朝末期の啓蒙思想家。海軍技術習得のために渡英、欧米の政治制度や思想に触れ、中国の立ち遅れを痛感して帰国。日清戦争敗北後、進化論の立場から政治改革の必要を強調。1915 年以降、儒教文化の尊重と復古主義を唱え、新たに勢力を得つつあった民主・科学・口語を提唱する文学運動に反対の立場をとった。翻訳書は『法的精神』、『国富論』等。
- 50) 梁啓超『論学日本文之益』
- 51) 梁啓超『広訳日本書設立京師訳書局析』、『東籍月旦』

【参考文献】

中国語書籍 (著者名アルファベット順)

《中国翻译辞典》湖北教育出版社 1997 年

中国历史系列《图说天下 清》吉林出版集团 2006 年

中国历史系列《图说天下 明》吉林出版集团 2006 年

陈福康《中国译学理论史稿》上海外语教育出版社 2000 年

邓绍基主编《中国文学通典—小说通典》解放军文艺出版社 1999 年

郭延礼《中国近代翻译文学概论》湖北教育出版社 1998 年

孔慧怡、杨承淑编《亚洲翻译传统与现代动向》北京大学出版社 2000 年

孔慧怡《翻译・文学・文化》北京大学出版社 1999 年

劉靖之主編《翻譯新焦點》商務印書館 2003 年

劉建雲『中国人の日本語学習史』学術出版会 2005 年

黎难秋主编《中国口译史》青岛出版社 2002 年

罗选民主编《外国文学翻译在中国》安徽文艺出版社 2003 年

马祖毅《中国翻译简史“五四”以前部分》中国对外翻译出版公司 1998 年

马祖毅、任荣珍《汉藉外译史》湖北教育出版社 2003 年

马祖毅《中国翻译史》上卷湖北教育出版社 1998 年

朱純深《翻譯探微》書林出版有限公司 2001 年

邹振环《20 世纪上海翻译出版与文化变迁》广西教育出版社 2000 年

日本語書籍 (著者名五十音順)

池田誠、安井三吉ほか『図説 中国近代史』法律文化社 1993 年

石橋崇雄『大清帝国』講談社 2000 年

入江曜子『溥儀』岩波書店 2006 年

内田慶市『近代における東西言語文化接触の研究』関西大学出版部、平成 13 年

- 何群雄『中国語文法学事始』三元社 2000 年
田中彰『明治維新と西洋文明』岩波書店 2003 年
寺田隆信『物語 中国の歴史』中央公論新社 1997 年
寺田隆信『紫禁城史話』中央公論新社 1999 年